
バカとテストと欠陥製品

— —

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと欠陥製品

【NNコード】

N5558Q

【作者名】

—

【あらすじ】

四月、人に優しく自分に厳しい、他人を思いやることのできるまさしく人間の鑑のような男、つまり、このぼくは、文月学園という試験校に転入することになった。

そこでぼくは、これまでの厄介事続きの日々とは打って変わった、平和な学園生活というものを送つてみるつもりであった。

しかし、そこはやはりと言ひべきか、そこで出逢ったのは癖のあらんばかりで……。

プロローグ（前書き）

はじめまして。
——と読みます。

これが初めての投稿となる初心者です。
読みづらいう�字も多いと思いますが、楽しんで頂ければ幸いです。

この小説は、原作（特に戯言シリーズ）を知らないと厳しいもの
があると思います。
注意してください。

プロローグ

文月学園。

科学とオカルトと偶然により完成されたと言われる「試験召喚システム」を試験的に導入した実験校。

進級試験の点数によって厳しくクラス分けされる。

それが、今現在、冴えない一介の戯言遣いに過ぎないぼくのいる場所の簡潔な情報だ。

とはいっても、ぼくのあまりにもお粗末な記憶力が遂に一念発起してことによつてようやくまともな機能を得たのかというと、もちろんそんなことはなく、2-Eと書かれたプレートのあると教室の前で立つた状態、さらに詳しく言うならば、その教室の中にいる教師に呼ばれるのを待つた状態で、文月学園の入学パンフレットを広げて読んでいるだけである。

カニニング、とも言うけど。

さて、多少変わったシステムを導入しているといえ、ただの試験校でしかないこの学園に、何故ぼくがいるのだろうか。

答えば簡単で、他ならぬ玖渚のやつの頼みだ。

まあ、当然といえば当然だが、この学園のスポンサーには玖渚機関がいる。その玖渚機関がこの学園の取り組みの成果を調査しようとしていたのを、あいつは田舎どく知っていたようで、代わりに調查すると言つて引き受けたらしい。力ずくで奪い取つた、というが正しいのかも知れないけど。

しかし、真に重要なのはそんなことではない。真に重要なのは玖渚の頼みにいかに応えてやるかということであり、そこを間違えてしまうようでは本末転倒もいいところだ。

けれど、情けない記憶力を誇るぼくのことだ、こまめに確認しな

ければふとした拍子に忘れてしまうかもしれない。だつたら、ここ
らで一度、確認なりなんなりをしておいた方がいいだろ。丁度、
なにもすることがなくて突つ立つてているのだし。

と、そのとき

「みきわめ汀目君、入つてきてください」

と、声が聞こえてきた。しかし、ぼくの知り合いにそんな名前の
人はいない。無論、ぼくだって違う。ならば誰か知らない人に声を
かけたのだろう。気にする必要はない。

さて、少し邪魔が入つたが気を取り直して頼みごとの確認をしよ
う。

玖渚の頼みは主に2つ。

1つは、さつきも言つた、この学園の取り組みの効果や成果の調
査。けれど、こからは適当にやればいいことだ。調査の仕事を
横取りしておいて、それはどうかと思わなくもないが、ぼくの仕事
が少しでも楽になるのだから、それはそれでいいと思う。

そしてもう1つ。ここ、文月学園の制服を手に入れてこい、とい
うものだ。しかも、男女両方のものが欲しいらしい。

玖渚なら、別にこんな手間のかかるこをしなくても簡単に手に
入れられるとは思うが、何故かは知らないけどぼくに手に入れさせ
たいみたいだ。まあ、どうせいつもの悪ふざけだろ。

それに、男物の制服ならぼくのを渡せばいいから、実質的には女
物の制服だけでいいことになる。

今回は、特に事件のようなものも起きないと思うし、結構楽な仕
事になる気がする。といつかそうであつて欲しい。

さて、一通りの確認も終わつたし、どうしてこようか。

なんて考えていると、突然教室のドアが開いて

「汀目君！ 聞こえてないんですか！？」

なんてことを言いながら教師らしき人物が出てきた。

当然のことながら、今この教室の前で立つているような人物は、

ぼくを除いては一人もいない。つまり、さつきからこの人はぼくに声をかけているのだろう。

「すいません。ちょっととぼうっとしました」

とりあえず、当たり障りない返事をしておいた。

「そうですか。これからは気をつけください」

「はあ」

「それじゃあ、早く中に入つて自己紹介をしてください。後、一応言いますが、チョークは有りませんよ」

それは一体どういう意味なんだろうか。文字通りの意味で、今現在この教室にはチョークがないということなのか、それとも、黒板に名前を書かせないでおこう、または、書く必要はないということを間接的に言つたかったのか。

しかし、そのどちらでもぼくには関係ないことだ。元々、名前を黒板に書いたりする気なんてないのでだから。

それじゃあ、教室に入ることにしようか。

戯言遣いがおよそ十年ぶりとなる普通の学校生活を始める瞬間だった。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？

作中で、いーちゃんが汀田と呼ばれていたのは、舞台が学園であるため名前がないと不都合な点が多く、なにかしらの名前が必要となつたからです。

また、名前にについては、作者の方で適当な偽名を考えても良かつたのですが、しつくりくるものが浮かばなかつたため、鏡の向こう側のものを使わせてもらつことにしました。

次回がいつになるかは分かりませんが、縁があつたまた会いましょう。

第一話

自己紹介。

読んで字の如く自身を他人へと紹介する行為であり、初対面の人とのコミュニケーションの第一歩だ。

そしてその際に重要となつてくるのが、相手に少しでも自分のことを知つてもらいたいという気持ちである。

などと、一般論的なことを考えていた思考を中止する。

何故なら、今すべきなのは現実逃避じみた思考ではなく、その思考のテーマでもあつた自己紹介を迅速に終了させることだからだ。無論、まだ始まつてすらいないけど。

つまり、今現在のぼくは他人からすれば、教卓に立つたままなにをするわけでもなくただ黙つているだけの転入生ということになるのか。

ぼくとしては初つ端からそんな黙りだんまりを決め込むような奴とは関わり合いになりたくないな、なんて思つてしまつ。

その関わり合いになりたくない奴はぼく自身だつたけど。

しかし、仮にも自己紹介と言つているのだから、いつまでもこのままという訳にはいかないだろうと思う。ただ、思ったことを行動に移すことができるかというと、それは全くの別問題だ。

けれども、物事というものは大抵に場合は意志とは無関係に進む。この場合もそうだ。

思つただけで行動には移そつとしないぼくにいい加減じれたのか、先生が声をかけてきた。

「汀田君？ どうかしたんですか？」

「どうもしませんよ」

「そうですか。それなら早く自己紹介を済ませて貰えませんか?」

「わかりました」

さて、ここまで言われてしまった仕方はない。腹を括つてしゃつと終わらせるとしよう。

「はじめまして。今田からこの学園に通つたことになった

」

……困つた。

自己紹介において、自分の名前をいつこうのはこわゆる鉄則である。

ちなみに、今回は澄百合のときは違い、潜入ではなく転入だ。必然、決して少なくはない時間をこの学園で過ごすことになるし、授業中には指名されることだってあるだらう。そのとき名前がないところのは非常によろしくない。よろしくないが、しかしだからといつて、こんなところで名前を公開するつもりなんて毛頭ない。だから、偽名を使うことにした。したが、一つ問題があるのを見落としていた。それは、偽名を覚えなければならないということだ。なんだそれくらい、などと他人は言うだらう。しかし、ぼくの場合は話が別だ。なんといっても、毎日のように顔を合わせていたはずのクラスメイトの名前はおろか、存在そのものさえも、ものの見事に忘却しきつた経験すらあるのだから。こまさり新しい名前を『えられたところ』で、到底覚えられるはずがない。

さて、ここまで言えば、いかに察しの悪い人物でも気付くだらう。そう、『察しの通り、ぼくは自身の偽名を忘れてしまつていた。

だからこそ困つてゐるのだった。

けれどまあ、解決するのは簡単だ。気は進まないが。しかし、そんなことを言つてゐる暇があるのなら、すぐにでもやつた方がいいのだろう。時間は有限だ。ぼくんかのために、いつまでも無為に使わせるのは申し訳ない。まあ、戯言だけね。

さて……、それでは。

と、自分自身を鼓舞するように心中だけで言つて、ぼくは、多くの持つ数少ない荷物の中から、生徒手帳を取り出す。

そして、開いて名前を確認する。

この、生徒手帳というものは、ざつやから身分証明書の役割を兼ねているらしく、名前や年齢、住所などが記載されている。記憶力の悪いぼくとしては、とても助かる訳で……。

それじゃあ、氣を取り直して、

「汀田俊希です。よろしくお願ひします」

と、自己紹介した。

したときに、「まさか、自分の名前を確認したのか！？」みたいな声があがつたりもした。

大いに同感だった。ぼくだって、自己紹介のときに自分の名前をいちいち確認するような人と会つたら、多かれ少なかれ驚くことだろう。

ただ、非常に残念なことに、それはぼくのことだった。

第一話

「それでは皆さん、仲良くしてあげてくださいね」と、先生がぼくの自己紹介の後に続いて言つ。

決してそんなことはないと思うし、実際、ぼくのためを思つて言ってくれているのだと思うが、その言い方だとまるで、ぼくと仲良くなることを強制してるようにもとれると思う。

放つておいたら友達ができない、なんて風に思われたのかも知れない。

その可能性は否定出来なかつた。むしろ、大いにあり得てしまつ可能性だらう。

少し悲しかつた。

閑話休題。

「汀田君はあそこに座つてください」

そう言つて、先生は一つの席？を指差す。

今更だが、ぼくが今いる教室は2—Fと呼ばれる教室で、厳しいクラス分け、その中の最下層にある教室だ。そして、この学園ではクラスのランクに応じて、設備に格差をつけていく。最上位のAクラスの設備は、システムデスクに個人用のエアコンや冷蔵庫など、少々行き過ぎたくらいであるらしい。トップがそれだけ極端なのだから、ボトムに関しても同じくらい極端であつても不思議はない。実際、このFクラスの設備には机や椅子すら無く、敷き詰められた古い畳の上に卓袱台と座布団があるだけだ。おまけに、壁はひび割れと落書きだけで、教室の隅は蜘蛛の巣さえもあつたりする。だからこそ、ぼくは席の後に疑問符を付けざるを得なかつたのだ。

どうでもいいことだけれど。

先生は話を続ける。

「前の席にはクラス代表の坂本君がいるので、わからないことなどは彼に聞いてください」

話が終わったようなので、指定された席に着く。

前の席の坂本君は背が高く、身長は180センチ強くらいあるんじゃないだろうか。細身ではあるが、しつかりと鍛えられているようだ。意志の強そうな田と野性味のある顔をしていて、短い髪はツンツンと立って、たてがみみたいだった。

なんというか、ぼくとは正反対な感じの容姿だ。

「坂本雄一だ。 よろしく頼む」

雄一君はそう言って手を差し出す。

「よろしく

ぼくも返事をして手を握り、握手をする。

なんだか、本当に久しぶりに、いつも普通のやり取りを初対面の人とした気がする。

少し感動。

「あっ！ 僕は吉井明久。 よろしくね」

すると、雄一君の横に座っていた子も話しかけてきた。

吉井明久、と言つらしい。

背丈は雄一君よりは低いけど、平均かそれより少し上くらいだろうか。目はパツチリしていて、顔の線も細い。髪は長すぎず、程よく長いと言つたところだろう。けつこう整つた顔立ちだ。

「よろしく

簡潔に返す。

「うん」

たつた一言の返事だったけど、明久君は嬉しそうに頷いてくれた。所謂、いい子、という分類に分けられるタイプの人間なんだろうと

思つ。

そういうひしてこるひが、どうやら自己紹介が始まらうだつた。
別に期待はしていないけど、頑張ればくの記憶力、なんて思つて
みたりして。

第一話（後書き）

こんにちは

今日はいつもより（とは言つてもまだ第一話だから、いつもと並んで
程回数は重ねてないけど）短くてすいません
キリがいいようにしようとした結果です
次の投稿で姫路さんを出せたらいいなあ……

第三話（前書き）

一言だけ、
ごめんなさい
短いです

第三話

「えー、おはようございます。一年F組担任の福原慎です。よろしくお願ひします」

と、寝癖をつけたままでコレコレのシャツを貯相ととれるような体に着た、言い方は悪いが、いかにも冴えないという印象がしないこともない感じの成人男性、さらに言及すると、世間一般では中年と呼ばれるような歳の男性としが言った。

話の内容からも分かることだが、彼がこのFクラスの担任の先生だ。

その先生は自分の名前を黒板に書こうとしたのか、黒板の方を向いたが、少しキヨロキヨロとすると、ハッとした様子をしたのちに、こちら側へと向き直る。

おおかた、名前を書こうつチョークを探すうちに、そもそもチョークが用意されてなかつたことを思い出した、といつたところだろうか。

ふと、教室に入るときのことを思い出す。

なるほど。あれはこういう意味だったのか。といつては、下手をしていたらぼくもあんな風になつていたかも知れない。

それは、ゾツとはしないまでも、多少なりはうんざりするような想像だつた。

話は続く。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？ 不備があれば申し出て下さい」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入つてないですー」
さつそく誰かが不備を申し出たらしい。

「あー、はい。我慢してください」

おい……！

それじゃあ、申し出る意味が無いじゃねえか……。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れます」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請して

おきましょ」

続々と出てくる申し出。

そのどれもが碌な対応をしてもらひえずには撃沈していく。
容赦がなかつた。

しかし、この設備は学校、いや、学術機関としてどうなんだろうか、
とか、と思わざるを得ない。

ぼくはこれまで、20年間とちょっとこう時間（今は高校2年生を名乗っているが）を曲がりなりにも生きてきた。

当然、こういった学術機関と呼ばれるような施設や機関、組織とは多少なりは関わる機会があつたし、実際に関わつてもきた。

まあ、関わつた5つのうち、2つは口が裂けてもまともだなんて言えないようなものだつたけれど。

しかしそれでも、こと設備に関してのみ言つならば、これはその5つのどれよりも劣悪だろう。

寺子屋か、ここは。

そして、極めつけがこの言葉だ。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてくんだから、この学校。

そして、かつて住んでいた骨董アパートが、寺子屋と表現したこ
こよりも数割増しでボロかつたという事実が、ぼくを何とも言えな
い気分にさせた。

ああ、みいじさん元気かなあ……。

第三話（後書き）

前回、次で姫路さんを出すとか言ひておきながら出せませんでした。
腑甲斐ないです。

しかも、更新さえも遅くて……。

でも、まだ頑張つていこうと思つてます。
生暖かい田で見守つていただけたら幸いです。

第四話

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願ひします」

福原先生の指名を受けて、廊下側の生徒のひとりが立ち上がって名前を告げる。

「木下秀吉^{きのしたひでよし}じゃ。演劇部に所属してある」

と、その生徒は言つた。

その生徒は少女だつた。

美少女と言つて差し支えのない少女だつた。

そして、驚くべきことに、

男装家だつた。

男装家。

まあ、それはいい。

世の中にはそういう人達が居る、といつことは世間知らずのぼく
だって知つてゐるし、それについてとやかく言つぱど、ぼくは世話
好きではない。

ただ、ここは学校だ。

先生たちに注意されたりはしないのだろうか。

そのあたり、少し気になつたりしないことも無いのだけれど、実際のところはどうなんだろうか。

閑話休題

話を戻して、容姿や特徴をまとめるとこりゃ。

まずは容姿。

体格は小柄で、肩にかかるくらいの長さの髪を緩く縛つてこる。
ゆるくしばって

顔も整っていて可愛らしい。
そして、特徴的な言葉遣い。

キャラがたつていて。

そんな第一印象だつた。

「 と、いうわけじゃ。 今年一年よろしく頼むぞい」
そう言って、微笑む秀吉ちゃん。
どうやら、どうでもいいことを考えて、さううちに自己紹介が終わ
つてしまつたみたいだ。

「……………土屋康太」

次の人は男の子だつた。

体格は小柄だが引き締まつていて、運動神経も良さそうだけど、

無口で大人しい印象。

ぼくの周りでは珍しいタイプだ。

「島田美波です。 海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

次は女の子。

「あ、でも英語も苦手です。 育ちはドイツだったので。 趣味は

「

「 吉井明久を殴ることです 」

隨分とピンポイントな趣味を持つていろいろようだ。 しかも、
暴力的。

「はうはうー」

けれど、そう言ってこちらに、正確には明久君に向かつて笑顔で
手を振る彼女は楽しそうだつた。

「……あう。 し、島田さん」

対照的に、明久君は少し青ざめているけど……。

「吉井、今年もよろしくね」

趣味からも分かるが、明久君と知り合いらしい。

そんな彼女についての確認。

小柄。 気の強そうな目。 ポニーテール。

美波ちゃんの自己紹介が終わってからは、名前を言つだけの単調な自己紹介が続く。

いつも言つては失礼だが、美波ちゃん以降の自己紹介は余りにも单调すぎて、まったく記憶されなかつた。

「 です。 よろしく」

そうして、明久君の前の席の人の自己紹介も終わつた。

次の人である明久君が立ち上がり言つ。

「 コホン。 えーっと、吉井明久です。 気軽に『ダーリン』つて呼んで下さいね 」

『ダアア——リイ——ン——!』

野太い声での合唱。

正直言つて気持ち悪かつた。

「 失礼。 忘れて下さい。 とにかくよろしくお願ひ致します」

現に、そう言つて席に着く明久君の顔色も悪い。

自業自得とはいえ、少しだけ同情してしまつ。

若干、気分を害することもあつたが、明久君の自己紹介も滞りなく終わり、先程までと同じ、単調な自己紹介が続いていくが、そのとき。

この教室に向かつて走つてくる足音を聞いた。

そして、教室のドアに視線を向けたとき、ガラリと音を立てて、
ドアが開いた。

そこにいたのは、息を切らせて、胸に手を当てて立っている女の子だっ
た。

第四話（後書き）

じふにわは

やつと姫路さんを出せました。

まあ、出せたと悩めるかは微妙な気もしますが。

それと、前回書き忘れてましたが、感想にて御指摘あつた世界観についてです。

世界観ですが、

ほとんど戯言メインです。

戯言の四つの世界のうち、表の世界の中に文田学園がある感じです。

なんのひねりもない感じですが、シンプルでいいかなと思います。

それでは、これからもよろしくお願いします。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

少女は言つ。

息が切れているためだろうが、その言葉は途切れ途切れだった。それに対して、

『えつ？』

と、教室全体からいかにも驚いたといつよつた声が上がった。今の台詞になにかおかしな点があつただろうか、いや、ない。

……反語法にしてみた。

彼女が来て、にわかに騒がしくなつていく教室。

平然としている人はほとんどいないが、それでも、やはりというべきか、平然としている人も少ないがいた。

その、数少ない人物の一人である福原先生が声を掛ける。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

彼女は瑞希ちゃんというらしい。

小柄な体に白い肌、そして、背中まで届く長くて柔らかそうな髪。先程、ただの自己紹介にも関わらず体を縮こまらせ声を上げていたこととも相まって、小動物のようだと思った。

そして、はじめの台詞と同様に、その容姿にもおかしな点はなかった。

にもかかわらず、

「はいっ！質問です！」

と、これまで一度もなかつた（仮にも転入生であり、おそらく、この場で最も質問を受けることに違和感が無いであろう立場に居る

ぼくにもなかつた) 質問という行為の発先は彼女に向いた。

「あ、は、はいつ。 なんですか?」

突然の質問に驚く瑞希ちゃん。

「なんでここにいるんですか?」

失礼にも程がある。

つまり、質問した彼はこう言いたいのだろう
あなたは自分たち以下だ、学年最低学力のクラスにさえ相応しくない学力しか持つていなければ

いくらなんでもそんな風に言つことはないんじやないかな
なんてことをこのぼくですら思つてしまつゝな言い草だ。

正直、ただの普通で一般的な女子生徒でしかない瑞希ちゃんには
つらい言葉だらう。

「や、その……」

事実、瑞希ちゃんは緊張し、己にかけられた心無い言葉に身体を硬くさせ、しかしそれでも、自身への質問(質問を装つた非難)に対して、健気(けなげ)に答えようとしていた。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」
言い訳。

それが彼女の答えのようだ。

しかし、失敗と言わざるを得ない。

その答えでは、彼からの非難に対する対応としては不十分だ。
不十分のはずなのに クラスの皆は『ああ、なるほど』
とうなずき、納得していた。

瑞希ちゃんの答えを聞き、クラス中でテストについての言い訳じみた声が上がる中、独り納得のいかないぼくは雄二君に説明を求めた。

「ねえ、雄二君。 ひとつ聞かせてもらえるかな?」

「ん? 汀目か。 一体どうしたんだ?」

「彼女、瑞希ちゃんへの質問のことだけ、結局どうこうことなの

かよく分からなくてや」

「ああ、そうか。お前は姫路のことを知らないんだつたな
そういうて、事の顛末てんまつについて説明してくれる雄一君。

説明後。

どうやらぼくは勘違かんちがいをしていたようだ。

質問をした彼は、純粹に、学力が高いはずの瑞希ちゃんがFクラスであることを不思議に思つただけであつて、ぼくが考えたような意図はなかつたらしい。

また、ぼくが言い訳だと思つた答えは真実の事実であるとことも分かつた。

簡単に言えば、ただのぼくの早とちりなのだが、ぼくの捻くれ者ひねさ加減や性格の悪さを表したような気がして、ほんの少しだけ後味が悪かつた。

第六話

そして、

「で、では、一年間よろしくお願ひしますっ！」

瑞希ちゃんは自己紹介を終わらせて、逃げるようにして明久君と雄一君の隣にあつた空あいている席に着いた。

「き、緊張しました……」

そう言つて、安心したかのように卓袱台に突つっ伏す彼女は、ひとつとするまでも無く、恥ずかしがり屋か氣の弱い子なんだと思つ。

「あのせ、姫路」

「姫路」

瑞希ちゃんに声をかけようとするものの、雄一君によつて見事に邪魔をされた明久君は、一瞬だけ、絶望したような表情になつたが、それはぼくには関係の無いことだ。

御愁傷様。

「は、はいっ。なんですか？　えーっと……」

そんな明久君の様子に気づくことも無く、雄一君に向き直つて、スカートの裾すそを直す瑞希ちゃん。

時として、無知とは残酷なものなかも知れない。

そんな戯言めいたことを考へている間にも、話は進む。

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

きちんと頭を下げる彼女は礼儀正しかつた。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

ようやく会話に参加できた明久君。

よかつたね。そう思わないことも無いが、口に出すことは無い。

だからといつわけではないけれど、彼女が、

「よ、吉井君！？」

と言つて、あからさまに驚き、

「姫路。 明久がブサイクですかん」

と、雄一君が止めを刺したのを聞いたとき、ぼくは明久君への同情を禁じえなかつた。

けれど、話は続く。

「そ、そんな！ 目もパツチリしてゐるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そう言わると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしないな。 僕の知人にも明久に興味を持つてゐる奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰？」

「そ、それつて誰ですかっ！？」 ついせつとき、ようやく会話に参加できたはずの明久君だが、実際はほとんど喋らせて貰えていなかつた。

それでも、そもそも参加すらしようとはしないぼくよりはまだマシなのかもしねり。

話は、続く。

「確か、久保」

名字を言つたところで、意味ありげに言葉を区切る雄一君。
そして。

「 利光だつたかな」

と、言い放つた。

久保利光。

ぼくはその人物を知らないし、ぼくの周りには少々どころか大分変わつた名前の人がかなりいるけれど、それでも、その、久保利光なる人物の性別が男であるということは、一目瞭然だつた。

この場合、「目」というよりは「耳」だつたけど。

でも、そんなことは別にどうちだつて良かつた。

今、この場で大事なのは、久保利光が男であるという事実が、明久君の心を深深く抉つたということだらう。

明久君、御愁傷様。

君の悲劇をぼくは忘れないよ。

ホント、戯言だけどさ。

「…………」

「おい、明久。 声を殺してさめざめと泣くな
このやり取りだけで、いつたいどれほどのダメージを明久君が受けたのかが窺える。

こういうことは、他人事だからこそ言えるのだろうけれど、それでも、少しだけかわいそうだった。

「半分冗談だ。じょうだん安心しろ」

雄二君、それはフォローになつていない。

「え？ 残りの半分は？」

だからこそ、明久君の疑問は当然ともいえた。

この疑問を、雄二君はどうやってかわすんだろうか。

「ところで姫路。 体は大丈夫なのか？」
なるほど。

話を戻すのか。

ぼくにしては珍しく、素直に感心した。

「あ、はい。 もうすっかり平氣です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

疑問に対しても全くとりあわない雄二君に対して、大きな声を出す明久君。

まあ、自分について疑問だし、やはり当然であるとも言える行動だが、タイミング、というか状況が悪かつた。

「はいはい。 その人達、静かにしてくださいね」

パンパン、と。

先生が、教卓を叩いて注意した。

「あ、すいませ」

明久君が謝る。

謝り終えるその前に。

バキイツ バラバラバラ……

いきなり、突如として、誰も予想だにしないタイミングで。先生の、クラスメイトの、そして、ぼくの前で。教卓は、廃棄物へと姿を変えた。

第七話（前書き）

「めんなさい
更新遅れました

.....。

瞬間、教室中に沈黙が起こる。
なんだ、なにが起きている?

この状況は、いつたい.....。

まさか、有り得ないとは思うけれど、あのいかにも冴えない中年のオッサンが、あの哀川さんや出夢くんに匹敵するだけの力を、暴力を保有しているとでも言うのか。

有り得ない。

一般的にも常識的にも有り得ない。

そんなこと、考えるまでもなく分かりきったことじやないか。

けれど、一般的だと常識的だなんて、そんな考えが、そんな判断が、そんな決断が、まるで役に立たない人達や現象、そして世界があることを ぼくは知つてしまつていて。

知りすぎて、しまつていた。

だから、わからぬ。

なにが起きたのも、なにが起きているのも、これから、なにが起こるのも.....。

ぼくは、また、戻つて来てしまつたのか.....。

やはり、ぼくが今更「普通」に混ざることなんて

結論 というか、オチ。

勘違い、だつた。

いや、考え過ぎだつた、と言つべきだらうか。
けど、まあ、そういうこと。

福原先生は見かけ通りの、ただの一般人で、見かけ通りの力しか

持つていなかった。

だから、教卓が壊れたのは、それ自体がとんでもなくボロかつたからだそうだ。

そのことは雄一君が教えてくれて、保証までしてくれた。
流石さすがのぼくも、その言葉を疑うことはなかった。

疑う理由がなかつた というのもあるが、それ以上に、袁川さんや出夢くんクラスの暴力を持った人間がこの表の世界にもいる、という可能性を考えたくなかったというのが大きかった。

閑話休題。

あの後、福原先生は気まずそうに替えの教卓と取りに行つた。
そして、彼が教室を出て行つてすぐには雄一君に話し掛けて、
あのことを聞き、保証してもらつたという訳だ。

今更だが、いくら突然のことにしてしまつたとはいえ、あれ
ほどまでに荒唐無稽こうとうむけいなことを本気で考えていたという事実は、一時
的にでも、ぼくを落ち込ませるには十分だつた。

だから、というわけではないが、ぼくとの話の後に、教室を出て
行く雄一君と明久君について、ぼくはなにも思わず、なにもしなか
つた。

その後、特になにをするでもなくぼつゝとしていたら、しばらく
したところで一人が戻り、そのまたすぐ後に、先生も替えの教卓を
持つて戻つて來た。

教卓は相も変わらずボロいままだつたが……。

そして、

「さて、それでは自己紹介の続きをお願ひします」

氣を取り直して続きを再開される。

「えー、須川亮です。趣味は」

それからは、またも同じように単調な自己紹介が続いた。
で、ようやく。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

最後の一人が終わった。

大した時間は掛かっていないはずなのに、途中だとかにいろいろあつたためになんだか長く感じた。

まあ、それはともかく、今は雄一君に意識を向けよう。

立ち上がり、教壇へとゆっくりと歩いていく雄一君。
不思議と貫禄のようなものさえあるように見えた。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生にそう問われた雄一君は鷹揚に頷く。

自信に満ち溢れたその態度は、どこかあの赤色を思い起させる。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きのように呼んでくれ」

彼はそう言って、さらに続けた。

「さて、皆さん一つ聞きたい」

ゆっくりと、一人ひとりの目を見るよつこにして告げる。
間の取り方が上手い。

これは、自然と注目させられる。

その証拠に、クラスメートの視線は雄一君に集中している。
そんな皆を見渡したのち、教室内の各所に視線を向ける。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つらられるように皆は雄一君の視線を追う。けれど、ぼくは雄一君から目を離さない。『 』というのだろうか。彼は、なにをしようとして。

ぼくは 雄一君の意図を掴めずにつかにいた。『 Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが 』

彼は話し始め、一呼吸おいて、静かに続ける。『 不満はないか？』

『 大ありじゃあつ！』

一部を除いた、二年F組の生徒全員が叫んだ。

「 どう？ 僕だってこの現状は大いに不満だ。 代表として問題意識を抱いている」

『 そうだそうだ！』

『 いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『 そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

次々と出てくる不平不満の声。

こういった声とかを報告すればいいのだろうか？ まあ、そういうのは後回しだ。

今はことの顛末を見届ける方が大事だ。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

皆の反応が予想通りだったのか、自信に満ちた不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが
野性味のあるハ^{やえぱ}重歯を見せて、」

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」
雄一君は、戦争の引き金を引いた。

結局、ぼくの人生に平穏の一文字はないのかも知れない。
全く因果な人生だよな、人間失格

第七話（後書き）

前書きでも書きましたが、
更新遅れて本当にすいませんでした。

言い訳に過ぎませんが、
春休みの宿題や
新しいクラスへの対応などで
ゴタゴタしていたため余裕がなかつたんです。
今後も頑張つていこうと思つてますので、
よろしくお願ひします。

第八話（前書き）

非常に遅れてしまいました
すいません

FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよう思つ

雄一君は、そう言った。

誰かに宣誓するかのようだ、ついでにやつた。

その後、訪れる沈黙。

『勞てゐつサがなー』
しかしそれが長くは続かず、
数瞬後には

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

なんで声がケラズ中から上かる

は一本なんなんだ?

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

何を黒鹿なことを

『河の隈廻がゆひにそよぐ』

ああ、嗚呼、ぼくを置き去りにして、どんどんと話が進んでいく……。

この流れは不味い。

判
わ
ら
な
い
。

けれど、そんなぼくの心情などお構いなしで、物語は進む。

根拠などあるまい。」のケテヌには詭駄召喚戦争で勝つ「」とのて

その言葉でやがてやがて

「それを今から説明してやる」

そう言つて不敵な笑みを浮かべる雄一君からは、正直嫌な予感しかしない。

「おい、康太。 置に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に來い」

「…………（ブンブン）」

「は、はわつ」

雄一君の視線の先を見ると、

康太、と名前を呼ばれた生徒が、懸命に否定のポーズを取つていた。

けどそれも、無駄な努力となるだろう。

あそこまでハッキリと置の跡がついていたら、ねえ……。

「土屋康太。 こいつがあの有名な、寡黙なる性識者『ムツツリー』だ」

「…………（ブンブン）」

あ、顔と手の動きが加速した。

諦めて認めてしまえば楽になれるのに。

どうしてそんなに必死になれるんだろうか…………？

何のために必死になるのだろうか…………？

ぼくも、いつかは、あんな風に必死になつて 一生懸命になつて生きられるようになれるのだろうか？

だとしたら 。

おつと、それは 今は関係のないことだった。

話を戻さないと。

『ムツツリー二だと…………？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか…………？』

『だが見ろ。 そこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ…………』

『ああ。 ムツツリーの名に恥じない姿だ…………』

意識を内側から外側へ戻すと、クラスの男子のほとんどが畏敬の念を康太君に向けていた。

この状況は一体なんなんだ。

全員がこうなのか？　と思い、少し辺りを見ると、疑問顔の瑞希ちゃんがいた。

良かつた、少ないとはいえ、一応の仲間（？）はいるみたいだ。
てゆうか、クラスの全員があんな風だつたら、いへりこのぼくでも辟易へきえきしてしまうだろ？と思つ。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知つているはずだ」

「えつ？　わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

話が、康太君についてから瑞希ちゃんについてへと変わつていった。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

あ、なんとなくだけど、話の意味するところが分かつてきたかも知れない。

「木下秀吉だつていい」

あれ？

少し予想外の名前があがつたけど……。

『おお……！』

『ああ。　アイツ確かに、木下優子の……』

『当然俺も全力を尽くす』

『確かになんだかやつてくれそうな奴だ』

『坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたのか』

『実力はAクラスレベルが一人もいるってことだよなー』
どんどんと教室中が活氣付いていく。

が、

「それに、吉井明久だつている

……シン

一瞬にして冷めた。

さながら、裏返したかのようだつた。

「ちょっと雄二ー！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのぞ！ 全くそ
んな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久つて』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ 折角上がりかけてた士気に翳りが見えるし！ 僕は雄
二たちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを つて、
なんで僕を睨むの？ 士気が下がつたのは僕のせいじゃないでしょ
う！」

独りで騒いでいる明久君には、皆からの冷めた視線が向けられて
いた。

「そうか。知らないようなら教えてやる。」 いつの肩書きは『
観察処分者』だ

へえ、肩書きがあるなんて、明久君は意外と凄い子なのかもしれ
ない。

肩書きを持つ男子高校生。

ちょっとした記念物になるんじゃないだろ？

そこに、

『……それつて、バカの代名詞じゃなかつたつけ？』

どうやら明久君はマイナス方向のベクトルで、凄い子だつたらし
い。

ちょっと納得。

「ち、違つよつー。ちゅつとお茶田な十六歳につけられた愛称で

「そうだ。バカの代名詞だ！」

「肯定するな、バカ雄一！」

「あの、それってどうしてこのおもちゃなんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうた類の雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具合だ」

なるほど、特例ということは、一般的な、試験召喚獣と呼ばれる何かしらは物には触れることができないらしい。

そもそもの駄馬召喚體がなんなのが知らんないほくははとも今現在は 役に立たない情報だけれど、それでも無いよりはマシだひつ。

「 そ う な ん で す か ?

そ れ つ て 漂 い で す ね 。

試 験 召 喚 獣 つ て 見 た

利ですよね」

瑞希ちゃんは本当に感心したみたいだったが、

あはは
そんな大したもんじやないんだよ

軽く手を振りながら否定する明久君の表情は、少し曇っていた。
ふーん。

みたいだ。

その証拠に、

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がや

られると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できぬヤツが一人いるつて

「おこなわよな」

なんて声まで上がり始めた。

ていうか、大したことないどころの話じやないし……。

「うーん、でもすると最早、ただの不良品でしかないだろ。」

「気にするな。じうせ、いてもいなくても同じよいつな雑魚だ^{やつ}」「まあ、それなら問題ないかな？」

「雄一、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね？」

「つむさいぞ、明久。みんな、確かにウチのクラスには明久のような、ゴミ以下の戦力にしかならないクズもいる」

流石にそれは言い過ぎじゃないかな、雄一君。

「しかし、それを補つてなお戦力と成りうるであろう転校生が、ウチのクラスにはいる。お前のことだぞ、汀田」

そんなの聞いてないんけど……。

ああ、さつきの嫌な予感。名前を呼ばれるまで忘れていたけどはこのことだったのかも知れない。

最近は比較的平和だったから油断していた。
また巻き込まれてしまつた。

物語の中心に立つのは、傍観者^{ぼうかんしゃ}の役割じゃないと言つのに。

『あの転校生か！ 確かに只者^{ただもの}じゃなさそうなヤツではあつたな！』
『なんか大人びていたしな！』

再び教室中が盛り上がりだすが、

『けどアイツ、自分の名前を忘れてたぞ？』

その何気ない一言によつて再び静かになつた。

わわ…

ざわ…

と、クラスメートたちが微かに話す声だけが聞こえる。

『普通、自分の名前を忘れるか？』

『どう考へてもありえないよな』

『本当に大丈夫なのか？』

なんて声があちこちからあがる。

だから期待されたりするのが嫌だつたのに。』

「ま、まあ、大丈夫だろ。 汀田は寝ぼけていたんだ、きっと『
士気が下がる皆へ、雄一君がフォローする。

正直、全然フォローにはなつていなければ……。

「と、とにかくだ。 僕達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う』

少し焦つたように、雄一君は言つ。

「皆、この境遇は大いに不満だろ?』

『当然だ!!』

『ならば全員筆(ペン)を一執れ! 出陣の準備だ!』

『おおーーっ!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!』

『うおおーーっ!!』

「お、おー……』

意外なことに、大人しそうな瑞希ちゃんも、控えめにではあるが拳(こぶし)を一揚げていた。

ぼくは揚げていないが、クラスのみんなは拳を揚げて、一体感にあふれていた。

続けて雄一君が、

「明久にロクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。 無事大役を果たせ!』

と、指示を出した。

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷(ひど)い目に遭うよね?』

「大丈夫だ。 やつらがお前に危害を加えることはない。 騙されたと思って行つてみる』

「本当に?』

「もちろんだ。 僕を誰だと思っている『
妙に自信あり気に雄一君は言つ。

そして。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

明久君が折れた。

いいように丸め込まれていた。

が、気づいた様子もなく、やけに堂々と教室を出て行く。

ひょっとするまでもなく、その姿は滑稽こっけいだった。

第八話（後書き）

お久しぶりになります
およそ2ヶ月も間を空けてしまい、申し訳ありません
これからも、このようなことが有るかと思いますが、
応援して頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5558q/>

バカとテストと欠陥製品

2011年6月10日01時10分発行